

帰敬式を受ける

親鸞聖人の僧伽に帰敬す

池田  
勇諦

目  
次

表紙デザイン  
(補) ツールボックス

- 自分の人生がどこで統一されるか ..... 1
- 人生第二の誕生 ..... 4
- 真宗門徒の条件 ..... 9
- 依りどころの選びとその反復 ..... 13
- 仏・法にもとづく人間の出遇い―僧伽― ..... 17
- 宗祖としての親鸞聖人の僧伽に帰敬する―真宗三帰依のすがた― ..... 24
- 法名―本名にめざめて生きる名告り― ..... 34
- 帰敬に始まる生活 ..... 37
- 子育て壇―教育壇― ..... 41
- あとがき ..... 46

■ 自分の人生がどこで統一されるか

帰敬式ききょうしきについて申し上げる場合に、私は私たちの「生き方」を問う帰敬式ききょうしきと、こう申し上げたいのです。

私はつね日ごろ、「生き方」と「暮らし方」ということを申しております。皆さんからは生き方も暮らし方も同じことではないかと言われそうですが、自分としては言葉を選んで使っているのです。

つまり、暮らし方というのは「境遇」です。具体的には、職業というものに象徴される、その人の暮らしざまということになると思います。また、生き方というのは、その暮らしざまの根っこにある課題、いわば「姿勢」です。どういう姿勢で、そ

の境遇を尽くしていくのかという問題です。生き方とひと口に言っても、何か漠然としているかもしれないませんが、根本的には、自分の人生がどこで統一されるのかということ。つまり、私たちはさまざまなことに出会って生きているわけですから、私も、そのさまざまなこととがらに出会って生きている自分の人生が、どこで統一されるのかということですね。

それは、扇子せんすでたとえるならば、要かなめのくぎですね。どんな立派な材料でつくられている扇子でも、この要のくぎ一本が欠落していれば、扇子はバラバラで扇子の機能を果たさない。扇子が扇子にならないわけです。扇子が扇子としての機能を持つということとは、まさにこの要のくぎ一本で統一されていることに

よって、開き、すぼまる。だから、私たちのこの人生が、扇子に例えられるわけです。このさまざま模様を展開する私の人生は、要のくぎ一本によって広がり、またすぼまるという、まさにその統一の一点がなければならぬのです。もしそうした一点がなければ、私たちの自我意識からは損得しかありませんから、順境で暮らせる人生は得、逆境で暮らす人生は損となるほかありません。ならば、逆境の人生には意味がないのでしょうか。誰一人好んで逆境を生きている人はありません。私たちにとつて「生きる意味」の一点が見いだされない限り、損得人生、勝ち負け人生で果てるほかないでしょう。

このことをもう少し自分として表現したいのですが、生きる

ということ、さまざまな顔を持つということですね。つまり私の場合で言えば、連れ合いのそばへ行けば夫という顔、子どもの前へ行けば父親という顔、学校へ行けば教師という顔、門徒さんに向かいあえば前住職じゆうしやくという顔、いろいろな顔を持つて生きておるわけです。

そのさまざまな顔がどこで統一されるのかということですが、それがなければ、まったくバラバラです。空中分解してしまふ。だから、そのさまざまな顔を統一する一点、その課題なのです。

## ■人生第二の誕生

このことを考えるときに、私が日ごろおくれん憶念していることがあ

ります。よく紹介することですが、北海道を舞台に活躍されたクリスチャンで有名な作家の三浦綾子さんを取り上げた朝日新聞の記事の言葉です。ちようど、世間では「日の丸」「君が代」の法制化の動きがあつて、そのなかで発せられた記事でしたが、その言葉が私にはとても響いたのです。それはこういう言葉です。

人々が国旗・国歌の問題で苦しむのは、それが隣国を侵すシンボルとなつた歴史を、人間として悔やんでいるからであつて、日本という国を単に国民だからでなく、人間として愛すればこそである。

(1999年10月26日付朝日新聞)